

依頼に対する断りの行動展開パターンに関する日台対照研究—女性友人同士の電話会話データの分析から—

施 信余

【キーワード】 依頼に対する断り・行動展開パターン・電話会話・「断り談話」・「断り成立」

1. はじめに

本研究は、日本人と台湾人による依頼に対する断りに焦点を当て、分析したものである。断りという言葉行動は、相手の好意や依頼に対して「その意に沿えない」という気持ちを相手に理解してもらう行動であり、その行動自体が相手の心情を害し、人間関係を損なってしまう危険性を伴うものである。したがって、断る際、断りを達成するほかに、人間関係を維持するため、相手に不快な思いをさせない配慮が必要であると思われる。

これまでの断りに関する先行研究は、主に調査紙を用いた談話完成テストやロールプレイなどの方法で調査されており、実際の会話における断りにはほとんど焦点を当てていない。しかもこれらの研究は、断る側の一度の発話を分析対象としているものが多く、談話レベルにおける断りにはあまり注目していない。また、筆者が調べたところ、台湾人を対象とした自然会話分析は未だほとんど行われていないため、台湾人の実際の言語行動の特徴を探ることは有意義な試みであると考えられる。

したがって、本研究は、日本人同士と台湾人同士の電話会話における依頼に対する断りを談話レベルから分析し、日台それぞれの断り行動の展開パターンを明らかにし、さらに、それらの使用特徴がいかに人間関係維持に機能しているかを考察することを目的とする。

2. 本研究における「断り」の定義

本研究では、依頼に対する断りに絞り、また、「断り」を、「依頼を受けたあとから、その話題が終わるまでの、断る側がとる一連の言語行動」と定義する。これは、ただ断りを達成するために用いるストラテジーを指しているのではなく、依頼側との人間関係を維持するためにとる様々

な言語行動も含んでいることを意味する。

3. 調査方法—電話会話

3. 1 調査協力者

日本人と台湾人それぞれ 52 名（依頼側 13 名、被依頼側 39 名）の計 104 名の協力を得た。日本人調査協力者は日本に在住し、東京都内の大学に在籍する大学生または大学院生で、台湾人調査協力者は台湾に在住し、台北地区の大学に在学する大学生または大学院生で、全員 10 代後半から 20 代前半までの女性である。

3. 2 調査手順

調査者が依頼側の調査協力者に、普段気軽にものを頼めるようなある程度親しい同性友人の中から学校の「先輩」「同級生」「後輩」を一人ずつ選んでもらい、それぞれの相手に携帯電話から電話をかけて、あらかじめ決めた「依頼内容」に従って依頼をしてもらった¹。

「依頼内容」は、「友人に、明日の午前中に自分の代わりに自分の男友達と一緒に国立国語研究所²に行って言語調査に関する実験に参加してもらうこと」に設定したが、その詳細な内容や会話の順序については、依頼側の調査協力者に任せることにした。依頼側の調査協力者に静かな場所から、できるだけ相手とゆっくり話せる時間に電話をかけてもらい、日本人同士と台湾人同士の会話各 39 例を集めた。

会話内容のすべてをテープレコーダー、あるいはボイスレコーダーで録音した。また、会話収録後、被依頼側の調査協力者に実験だったことを告げて承諾を得た上で、調査協力者の双方にフォローアップ・アンケートを記入してもらった。

4. 分析方法

録音した計 170 分程度の会話を「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美 2003)に従って文字化する。さらに、得られた会話の文字化資料を以下の項目に従って分析を行う。

4. 1 電話会話における「断り談話」

本研究は、ザトラウスキー (1993) の定義に従い、電話の呼び出し音が鳴ってから、二人の会話が終わって電話を切るまでの一連の会話を 1 単位の「電話会話」として考える。また、電話会話において、依頼に関する最初の発話から、依頼内容に係る会話のやりとりが終わるまで

を、一つの「断り談話」とする。以下に、「断り談話」の起点及び終点について述べる。

①「断り談話」の起点

電話会話の開始部が終わった直後に、依頼側の調査協力者による依頼に関する最初の発話を、「断り談話」の起点とする。

②「断り談話」の終点

依頼内容に関係する会話のやりとりが終わった直後に、他の話題に替えて話す場合もあり、直接電話の終了部に入る場合もある。ここでは、依頼内容に関係する会話のやりとりが終わっていれば、「断り談話」が終わっていることとする。しかし、電話の終了部で再び依頼内容に言及することがあり、これは南（1981）が「回帰」と呼んでいるものであるが、ここではその部分も「断り談話」の一部として考える。

③「断り成立」

国立国語研究所（1994）では、「相手が表明した断りの意思を受け入れること」を、「断りへの了解」とする。本研究はこの定義に従い、「断りへの了解を示す発話」を、「被依頼側の断りたい意思を認め、もうこれ以上依頼を継続しないことを伝える発話」と定義する。すなわち、「断りへの了解を示す発話」が現れたら、断りが成立したこととする。

上述したように電話会話から「断り談話」を認定し、さらに、依頼側が「断りへの了解を示す」最初の発話を認定して、一つの会話を「断り成立まで」と「断り成立後」の二段階に分ける。

4. 2 「断り談話」の構成要素

本研究では、「断り談話」における断る側の言語行動を主な分析対象とする。4. 1 節で述べた方法で認定した各「断り談話」に対して、さらに本研究で提示した七つの「断り談話」を構成する主要な要素に該当するものをコーディングする。以下に各構成要素の定義と実例を提示する。

【表 1】「断り談話」の構成要素

No.	項目名	定義・例
1	回避	【定義】相手の依頼に対して断りの意向を直接的に伝えるのを避けること 【例】「ちょっと微妙かも」／ 「不知道耶く邊説邊笑」（わからな—い<笑いながら>）」
2	直接的な断り	【定義】相手の依頼に対して断りの意向を直接的に伝えること 【例】「空いてはいるけど行きたくない<笑い>」／ 「我明天不行耶（明日だめなの）」
3	理由説明	【定義】相手の依頼を断る理由について述べること

		【例】「明日ね、バイトなんだ」／ 「我明天有事情耶（明日用事あるの）」
4	代案提示	【定義】相手の依頼を断る代わりに、または相手の依頼を断った後に、問題になっている事柄について自分なりの解決策を提示すること 【例】「メーリングリストに回そうか」／ 「還是，我幫你問問看，只要是女生就可以嗎（それとも、私が代わりに聞いてみようか。女の子だったらいいの?）」
5	謝罪や残念な気持ちの表明	【定義】相手の依頼を断ることに對して詫げる、または自分が協力できないことに對して残念な意を伝えること 【例】「ごめん、何の役にも立てなくて」／ 「不好意思（ごめんね）」
6	否定的な見解の表明	【定義】依頼の内容について否定的な判断や意見を述べること 【例】「3時間まずちょっときつい、きついなー」／ 「聽起來很無聊（退屈そう）」
7	条件提示	【定義】今の条件のままだと協力できないが、自分が提示した条件に替えてくれれば承知する可能性があることを伝えること 【例】「ほかに当たってみて、全然だめそうだったら私も考えてみるんだけど、先に言語系の子で聞いてみてもらっても平気かな」／ 「我可能只有下午可以幫你（たぶん午後しか手伝えない）」

5. 結果と考察

断る側にとって、「断り成立まで」の段階と「断り成立後」の段階において、それぞれ異なる課題が課されている。つまり、「断り成立まで」の段階においては、断りたいという意思をどのように伝えるかがポイントになり、一方、「断り成立後」の段階では、人間関係を維持するためにどのように対人配慮行動をとるかが重要な課題になると考える。

以下に、「断り談話」における断り行動の展開パターンの分析結果を述べる際に、「断り成立まで」と「断り成立後」の二段階に分けて述べることにする。それぞれの段階において、まず日本人同士の 39 会話全体と台湾人同士の 39 会話全体の結果を述べてから、相手との「相対的力」³ 関係による影響をみることにする。

5. 1 「断り成立まで」の段階における全 39 会話の結果

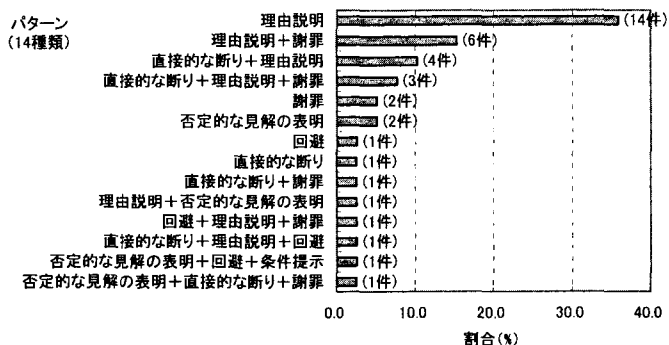
5. 1. 1 日本人調査協力者の場合

「断り成立まで」の段階における日本人協力者の全 39 会話の結果について、理由を説明するのみで断りの成立に至った例が全体の 35.9% を占めており、最も多くみられた。次に、「理由説明+⁴謝罪」や「直接的な断り+理由説明」のパターンはそれぞれ 15.4% と 10.3% を占めている。その他、「直接的な断り+理由説明+謝罪」「謝罪のみ」「否定的な見解

の表明のみ」などと、全部で 14 種類のパターンがみられた。

【図 1】「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン

—日本人調査協力者の場合（全 39 会話）

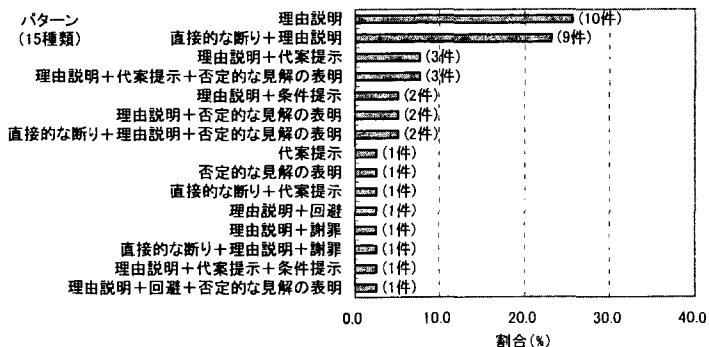


5. 1. 2 台湾人調査協力者の場合

「断り成立まで」の段階における台湾人協力者の全 39 会話の結果について、最も多い「理由説明」のみで断りが成立した会話と、二番目に多い「直接的な断り+理由説明」で断りが成立した会話を合わせて、全会話の 48.7%を占めている。また、「理由説明+代案提示」や「直接的な断り+代案提示」などのような「代案提示」が含まれているパターンが 9 例もあり、「断り成立後」の段階に現れやすいと思われる「代案提示」が「断り成立まで」の段階で用いられていることは特徴的である。

【図 2】「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン

—台湾人調査協力者の場合（全 39 会話）



使用頻度上位三つのパターンを【表 2】にまとめてみると、日本人協力者も台湾人協力者も、「理由説明」のパターンを最も多く使うことがわかった。この結果から、日本人と台湾人にとって、この「理由を説明する」パターンは断りたい意思を伝えるのに効果的と言えるであろう。

日本人同士の会話に二番目に多い「理由説明+謝罪」のパターンは、台湾人同士の会話には1例しかみられなかった。また、この段階において「謝罪」が含まれている会話は日本人同士の会話には14例あったが、台湾人同士の会話には2例しかなかった。

台湾人同士の会話に三番目に多い「理由説明+代案提示」「理由説明+代案提示+否定的な見解の表明」の二つのパターンは日本人同士の会話にはみられなかった。そして台湾人同士の会話にはこの二つのパターン以外にも「代案提示」が含まれているパターンがいくつかあったが、日本人同士の会話には、「断り成立まで」の段階における「代案提示」の使用は今回の調査ではまったくみられなかった。

【表 2】「断り成立まで」の段階における全 39 会話の断り行動パターンの日台対照

順位	日本人調査協力者 (39 会話)	台湾人調査協力者 (39 会話)
1	「理由説明」 (14 件 ; 35.9%)	「理由説明」 (10 件 ; 25.6%)
2	「理由説明+謝罪」 (6 件 ; 15.4%)	「直接的な断り+理由説明」 (9 件 ; 23.1%)
3	「直接的な断り+理由説明」 (4 件 ; 10.3%)	「理由説明+代案提示」 「理由説明+代案提示+否定的な見解の表明」 (3 件 ; 7.7%)

5. 2 「断り成立まで」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた結果

5. 2. 1 日本人調査協力者の場合

「断り成立まで」の段階における日本人協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、まず、三つのグループともに、「理由説明のみ」のパターンが一番多く使われている。次に「直接的な断り」の構成要素が含まれているパターンについて、JOK⁵とJSKにはそれぞれ5例あったのに対して、相対的力が弱い後輩であるJYKには、「直接的な断り+謝罪」の1例のみだった。JYKは、「直接的な断り」を用いるよりは、相手の依頼に対してなぜ自分がその行為を実行しない、あるいはできないのかを相手にわからせる「理由説明」のパターンや「理由説明」に「謝罪」が付随するパターンの使用に集中する傾向があるようである。また、

数は少ないが、比較的に間接度の高い「謝罪のみ」のパターンと「回避のみ」のパターンは、JOK にしかみられなかった。「謝罪」や「回避」だけで断りの成立に至ったのは、相対的力の強い先輩に対して、依頼側がねばらずに早めに依頼をやめてしまったからだと考えられる。そして、JSK では、使われたパターンが多様で、特にどれかのパターンに集中する傾向はみられなかった。

【表 3】「断り成立まで」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン—日本人調査協力者の場合

パターン（14種類）	JOK	JSK	JYK	小計
理由説明	5	3	6	14
理由説明＋謝罪	0	2	4	6
直接的な断り＋理由説明	3	1	0	4
直接的な断り＋理由説明＋謝罪	1	2	0	3
否定的な見解の表明	0	2	0	2
謝罪	2	0	0	2
回避	1	0	0	1
直接的な断り	0	1	0	1
直接的な断り＋謝罪	0	0	1	1
理由＋否定的な見解	0	0	1	1
回避＋理由説明＋謝罪	0	0	1	1
直接的な断り＋理由説明＋回避	0	1	0	1
否定的な見解の表明＋直接的な断り＋謝罪	1	0	0	1
否定的な見解の表明＋回避＋条件提示	0	1	0	1
合計	13	13	13	39

5. 2. 2 台湾人調査協力者

「断り成立まで」の段階における台湾人協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、TOK には「理由説明のみ」のパターンが一番多いのに対して、TSK と TYK には「直接的な断り＋理由説明」が一番多くみられた。また、台湾人協力者のどのグループも、現れたパターンのバリエーションが多い。「直接的な断り」や「代案提示」などの使用に目立った特徴はみられなかったが、以下の2点に注目してほしい。

- ・「直接的な断りのみ」のパターンは現れていないが、「直接的な断り」が含まれているパターンの使用には、特に「相対的力」関係による影響はみられず、ほぼ同じ頻度で使われていた。
- ・1例しかないが、TOK による「代案提示のみ」のパターンは、断る理由も依頼内容に対する否定的な見解もなく、「先にほかの人を探してみたら？」と消極的な代案を提示して断ったこの例は、学校の先輩だからとはいえ、親しい友人同士の会話にはめずらしいと思われる。

【表 4】「断り成立まで」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン—台湾人調査協力者の場合

パターン(15種類)	TOK	TSK	TYK	小計
理由説明	6	2	2	10
直接的な断り+理由説明	1	4	4	9
理由説明+代案提示	1	1	1	3
理由説明+代案提示+否定的な見解の表明	1	2	0	3
理由説明+否定的な見解の表明	0	0	2	2
理由説明+条件提示	0	1	1	2
直接的な断り+理由説明+否定的な見解の表明	2	0	0	2
代案提示	1	0	0	1
否定的な見解の表明	0	1	0	1
直接的な断り+代案提示	1	0	0	1
理由説明+回避	0	0	1	1
理由説明+謝罪	0	1	0	1
直接的な断り+理由説明+謝罪	0	1	0	1
理由説明+回避+否定的な見解の表明	0	0	1	1
理由説明+代案提示+条件提示	0	0	1	1
合計	13	13	13	39

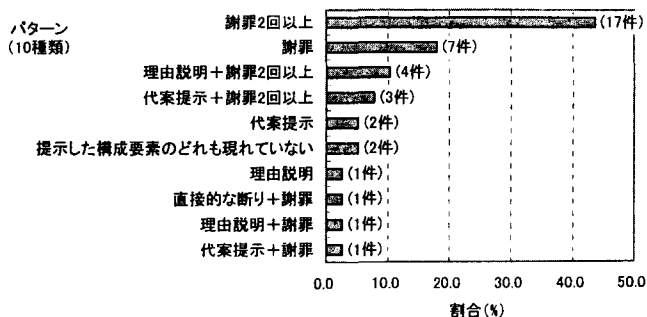
5. 3 「断り成立後」の段階における全 39 会話の結果

5. 3. 1 日本人調査協力者の場合

「断り成立後」の段階における日本人協力者の全 39 会話における結果について、断った後に謝罪を 2 回以上した例が全体の 43.6%を占めており、他のどのパターンよりも圧倒的に多いことが明らかになった。そして、「謝罪 1 回」のパターンが 17.9%占めており、他には「理由説明+謝罪 2 回以上」「代案提示+謝罪 2 回以上」などのパターンがあり、全部で 10 種類のパターンがみられた。

【図 3】「断り成立後」の段階における断り行動のパターン

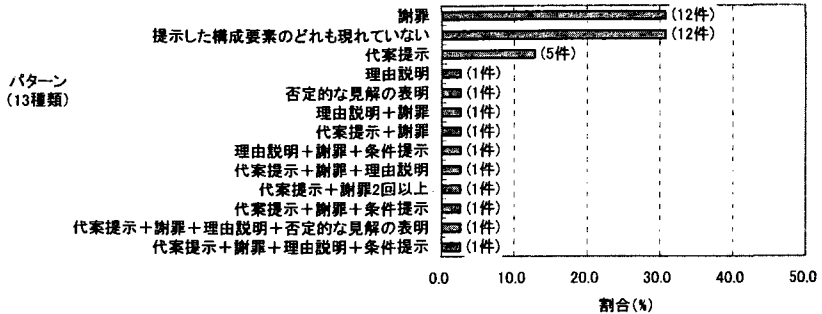
—日本人調査協力者の場合（全 39 会話）



5. 3. 2 台湾人調査協力者の場合

「断り成立後」の段階における台湾人協力者の全 39 会話における結果について、「謝罪 1 回」と「本研究で提示した構成要素のどれも現れていない」の二つのパターンが最も多く、それぞれ全体の 30.8%を占めている。そして、「代案提示のみ」のパターンも 5 例みられた。他には、「理由説明のみ」や「否定的な見解の表明のみ」など、全部で 13 種類のパターンがみられた。

【図 4】「断り成立後」の段階における断り行動のパターン—台湾人の 39 会話



「断り成立後」の段階において使用頻度上位三つのパターンを【表 5】にまとめてみると、日本人同士の会話では「謝罪 2 回以上」のパターンが最もよく使われているが、台湾人同士の会話にはそれが 1 例も見られず、「謝罪 1 回」と「提示した構成要素のどれも現れていない」のパターンが圧倒的に多かった。一方、台湾人同士の会話に多かった「提示した構成要素のどれも現れていない」のパターンは、日本人同士の会話には 2 例のみだった。また、「謝罪」について、断りの意思を表明した後に相手との人間関係を維持するためによく使われると言われており、日本人同士の会話には多く使われているが、台湾人同士の会話にはこの段階において「謝罪」が一回も使われていない例が 19 もあり、全体の 48.7%を占めている。そして、「代案提示」が含まれているパターンについて、台湾人協力者による使用の頻度は日本人協力者のほぼ二倍であり、より積極的に相手の事情に配慮を示し、代案を提示しているようである。

【表 5】「断り成立後」の段階における全 39 会話の断り行動パターンの日台対照

順位	日本人調査協力者 (39 会話)	台湾人調査協力者 (39 会話)
1	「謝罪 2 回以上」 (17 件 ; 43.6%)	「謝罪」「提示した構成要素のどれも現れていない」 (12 件 ; 30.8%)
2	「謝罪」 (7 件 ; 17.9%)	—
3	「理由説明+謝罪 2 回以上」 (4 件 ; 10.3%)	「代案提示」 (5 件 ; 12.8%)

5. 4 「断り成立まで」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた結果

5. 4. 1 日本人調査協力者の場合

「断り成立後」の段階における日本人協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、JOK、JSK、JYK 三つのグループともに、「謝罪 2 回以上」のパターンが最も多くみられた。それは、【会話例 1】のようなやりとりがあるからと考えられる。頼まれたのに断ってしまった場合、謝罪表現で申し訳ない気持ちを表し、一方、依頼側も相手に困らせた、断らせてしまったことへの謝罪表現をたくさん使っている。

「代案提示」の使用について、JYK では、「代案提示」「代案提示+謝罪」「代案提示+謝罪 2 回以上」のいずれも使われていないという結果がみられた。それは、後輩である自分が先輩に代案を提示する立場にない、余計な事をしかねないことを自覚しているからかもしれない。

【表 6】「断り成立後」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン—日本人調査協力者の場合

パターン	JOK	JSK	JYK	小計
謝罪 2 回以上	5	6	6	17
謝罪	1	2	4	7
理由説明+謝罪 2 回以上	2	0	2	4
代案提示+謝罪 2 回以上	1	2	0	3
代案提示	2	0	0	2
提示した構成要素のどれも現れていない	1	1	0	2
その他	1	2	1	4
合計	13	13	13	39

【会話例 1】 JBI02-JOK02

(先輩である JOK02 が依頼を断った後、何かいい方法ないかと悩んでいるところ…)

JOK02	うん…、なんか、どうしよう?。
JBI02	／沈黙 3 秒／あ、いえ、あの、でも、はい、そんな、大、大丈夫ですく 2 人で笑う。
JOK02	いやでも、うん…、ほんとにごめんね。
JBI02	あ、いえ、ほんとこちらこそ突然すいません<笑いながら>。
JOK02	いやいやいや。
JBI02	うん。
JOK02	うん、なんか、あまり力になれなくて=。
JBI02	=あ、いえ、そんな、そんな気にしないでください。
JBI02	あ、はい、じゃ、ほんとと突然すいませんでした。

5. 4. 2 台湾人調査協力者

「断り成立後」の段階における台湾人協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、TOK と TYK とともに、「謝罪 1 回」と「提示した構成要素のどれも現れていない」の二つのパターンの使用頻度を合わ

せて、全体の 77%を占めており、圧倒的に多かった。それに対して、TSK では、「謝罪 1 回」と「代案提示のみ」の使用が他のパターンより若干多いが、全体的にパターンのバリエーションが非常に多い。しかも、TOK と TYK に比べて、提示した構成要素のどれも使わないよりは、「代案」や「条件」を提示して会話を終わらせる特徴がみられた。

【表 7】「断り成立後」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン—台湾人調査協力者の場合

パターン	TOK	TSK	TYK	小計
謝罪	4	3	5	12
提示した構成要素のどれも現れていない	6	1	5	12
代案提示	1	3	1	5
その他	2	6	2	10
合計	13	13	13	39

6. まとめと今後の課題

以下に得られた結果をまとめる。

「断り成立まで」の段階において、日本人協力者も台湾人協力者も「理由説明のみ」のパターンを多く使用している。このことから、日台ともに、「理由説明」は断りたい意志を伝えるのに効果的と言えるであろう。また、台湾人同士の会話 39 例のうち、「理由説明」が使われているのは 37 例あったことや、依頼側の協力者の [那你要給我一個確切的理由 (じゃ明確な理由を教えてくれ)] などの発話から、台湾人は断る際に理由を説明したか否かを重要視する傾向があることがわかった。

また、「断り成立後」の段階において、台湾人協力者は、一度だけ詫びるか、本研究で提示したどの構成要素も使わなかったというパターンがそれぞれ 3 割程度占めているのに対して、日本人協力者は、「謝罪 2 回以上」のパターンが圧倒的に多いことが明らかになった。それは、この段階において、断りによって生じた気まずさを緩和するために、依頼側と断る側が詫び合っている例が非常に多かったからだと考えられる。

本調査から、相手との「相対的力」関係による影響はあまりみられなかったが、「謝罪」や「回避」のみで断りの成立に導いた会話は JOK にしかなかったことや、JYK は先輩に代案提示をしないこと、台湾人協力者は同級生の依頼を断った後、より積極的に代案提示をしたり条件提示をしたりするなどの興味深い結果がみられた。

今後は、断る側の言語行動を、依頼側による働きかけによく関連付けて、依頼と断りを相互行為と捉え、その両者のやりとりの相互関係に注目して分析を深めていきたい。

【注】

- ¹ この際、依頼をされる側の調査協力者が依頼を断ったものだけを有効データとする。依頼が受け入れられた場合、相手を替えてやり直してもらう。
- ² 台湾人の場合、「国立国語研究所」と性質的に似ていて、都心から少し離れている場所にある「中央研究院」という研究機関にする。
- ³ この「相対的力(power)」は、あくまで当該の状況において、聞き手が話し手に対してもつ「相対的力」を指すものであり、「権力」「勢力」などのような社会的に規定される概念ではない(詳しくはBrown and Levinson 1987を参照)。ここでは、「学年の差」を指す。
- ⁴ 「+」記号は順番を示すものではない。項目の順番が入れ替わる場合がある。
- ⁵ 調査協力者を表す記号の説明は下記のようなものである: J-日本人、T-台湾人、BI-依頼側、K-被依頼側(断る側)、O-依頼側の学校の先輩、S-依頼側の学校の同級生、Y-依頼側の学校の後輩。

【参考文献】

- 馬場俊臣・禹永愛(1994)「日中両語の断り表現をめぐって」、『北海道教育大学紀要』第45巻第1号、43-54.
- Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 国立国語研究所(1994)『伝えあう言葉4 機能一覧表』、日本語教育映像教材中級編 関連教材.
- 劉玉琴、小野由美子(1996)「中日母語話者の『断り』発語行為に見られる相違について」、『中国四国教育学会教育学研究紀要』第42巻第2部、540-545.
- 南不二男(1981)「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として」、藤原与一先生古希記念論集『方言学論叢』I、三省堂、87-112.
- 施信余(2004)『談話レベルからみた依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人大学生同士と台湾人大学生同士との比較—』、平成15年度東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- (2005)「談話レベルからみた依頼に対する断りの日台対照—親しい友人同士の会話データをもとにして—」、社会言語科学会第15回大会発表論文集、16-19.
- 宇佐美まゆみ(2003)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」、『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2)(研究代表者:宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.
- ザトラウスキー・ポリリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』、くろしお出版.

(し しんよ・早稲田大学大学院日本語教育研究科博士課程2年)